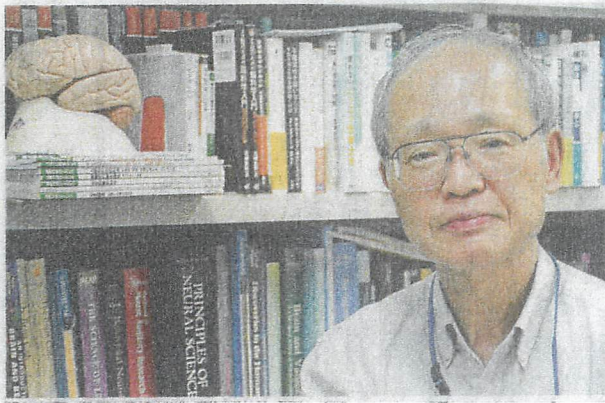


第3章 拡張⑧



塚原の弟子、小田洋一(名古屋大名誉教授)と親交が深い桜井。事故後、小田が師の名代として各国を巡ったことを覚えている

脳と「心」

御菜鷹に逝った科学者

心って何だ。世界中の多くの人が昔からずっと考えている「超難問」。同志社大脳科学研究科教授の桜井芳雄(69)も半世紀向き合ってきた。

「一つ間違いないのは脳の活動だということ。脳が止まれば、心も止まる」。大前提を確かめつつ、最新の理解を語った。「心は脳の活動から生まれた、次元

が一つ上の現象だろう」

五感によって入力された情報を記憶し、筋を動かすことで出力していく。脳の基本的な機能だ。「一連の活動を、上から俯瞰的に見ている。私たちはそれを心

と呼ぶのではないか」

哲学的な考えからの着想ではなく科学的な根拠があるという。ラットに自分の神経細胞を発火させ(情報を流させ)、餌を取らせる実

心の不思議 向き合う

験。多くの餌を欲するラットは、次第に自らの意思で脳内の神経細胞を発火させるようになっていく。

「不思議だと思いませんか」。意思も神経細胞の発火から生まれているはずなのに、それがいつの間にか神経細胞の発火を制御する側になると、桜井は主張する。正確な検証こそまだだが、

海馬をはじめ、脳内のどの部位でも起こり得ることではないかと受け止める。

「心はつまり、意識や意図の部分。脳はこれを次元の違う現象として生み出している」

捉え方の背景には学問上のルーツがある。

学科を選んだ。

心理学はできて150年と「若い」学問。「哲学や文学と違うのは、実験科学ということ。行動を計測することで証拠を集め、心を論じる」。緊張時の発汗。血圧や顔色の変化。それらも行動とみなし徹底して調べること。「心が見える」と考えるのだという。

会も少しずつ増えた。ポスター掲示が中心の今と異なり、当時は口頭発表が主。「ああした研究をする」、学習の過程で脳がどう変わるか分かりますね」。自分の発表を肯定的に評価してくれた人がいたと、指導教授が教えてくれた。塚原仲晃だった。

桜井は塚原がよく、最前列で多くの発表に耳を傾けていた姿を記憶する。「あれほどの大先生が、一番前で聞いている。そこで自分のことを多少なりともポジティブに感じてくれた。非常に勇気づけられた」

事故は助手として勤めた広島大の官舎で知った。ニュースで「ツカハラナカアキラ」の名が流れた。「今後の脳研究は」などと、当時の桜井は思えなかった。「私にとっては、ただ、途方もない損失でした」

京都大大学院に81年まで在籍する間、学会に出る機

(敬称略)